

当報告の内容は著者の著作物です。

国際ワークショップ「ボルネオの言語研究とマレー語研究の過去と現在」

報告要旨

日時：2015年9月7日（月）8:00-16:30 場所：Main Meeting Room Faculty of Humanities, Arts and Heritage, Universiti Malaysia Sabah (UMS)

主催

- The Kadazandusun Chair and Faculty of Humanities, Arts and Heritage, UMS
- SIL Malaysia
- Kota Kinabalu Liaison Office, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies (ILCAA, TUFS)

使用言語：マレー語、英語

参加者：計35名（発表者を含む）

このワークショップは、サバ州を中心とするボルネオの少数言語およびマレー語を研究する研究者が集まり、各研究グループまたは研究者が遂行している研究活動とその成果を共有するために開催された。

計8件の発表が、午前の2セッション「サバ州の言語」「ボルネオの少数言語」と午後の1セッション「マレー語の態」に分けて行われた。

午前中の最初の発表では、SIL Malaysiaが行ってきたサバの少数言語に関する研究活動の歴史と、近年SIL MalaysiaとUMSが共同で行っている研究活動に関する報告が行われた。両機関は、世界最大規模の言語目録 Ethnologue: <https://www.ethnologue.com/>に掲載されているサバ州の言語に関する情報をアップデートするため、昨年度から住民からの聞き取り調査を行っている。この調査により、サバ州先住民族の社会言語学的状況がより正確に把握されたばかりでなく、先住民以外の言語（主としてインドネシアのフローレスで話されているラマホロット語やスラウェシ島南西部の言語ブギス語、ジャワ語など）の話者についても実状が明確になったということである。

続いて、これまで十分な注意が払われてこなかったサバ州のマレー語、および、サバ州やブルネイ国内の少数言語に関する研究発表が行われ、活発な議論

が交わされた。午後のセッションでは標準マレー語の態に関する発表が行われた。発表後の議論では、特に、規範文法と実際観察される用法の違いをどのようにとらえるべきか、また、標準的な書きことばと口語の違いに関して議論が行われた。

発表者は、サバを拠点として活動する UMS および SIL マレーシアの研究者、および、日本、ブルネイ、アメリカ合衆国からの参加者から成り、ボルネオの言語研究とマレー語研究の両方に対してこれまでになかった新しいネットワークが構築された。国内からは床呂郁哉 FSC 長と塩原所員の他に外語大大学院総合国際研究院の野元裕樹講師も参加した。

このワークショップは UMS, SIL Malaysia, ILCAA の三者共催企画としては 2014 年度 8 月の言語ドキュメンテーションワークショップ以来、二度目のイベントである。前回に続いて会場を提供し、様々な便宜をはかってくださった UMS にこの場を借りて心より感謝申し上げます。

塩原朝子 (AA 研所員)